

# 女流義太夫・人間国宝

## 竹本駒之助師を囲む記者懇親会レポート



KAAT初お目見得公演を前に、去る10月21日(月)、tvk(テレビ神奈川)会議室で、駒之助師を囲む記者懇親会が行われました。

同日お昼のtvk生放送番組に出演し、お名前の由来や人間国宝を受賞されたときのエピソード、今回の演目の聴きどころなど語られた駒之助師。その後、記者たちを前に、くつろいだ雰囲気の中で、義太夫を始められたきっかけ、師匠たちのもとでの厳しい修行、今回のチラシに写真が掲載されている淡路での襲名披露公演、「女流義太夫」についてなど、1時間以上にお話しくれました。

今回はそのなかからポイントをご紹介します。

——神奈川県秦野市に40年近くお住まいの駒之助師は、人形浄瑠璃発祥の地として知られる兵庫県淡路島のご出身です。義太夫を始められたきっかけからお話してください。

**駒之助師** 終戦後、中学に入った時からです。義太夫の盛んなところでしたが、戦争で衰退しつつあったので、中学の校長先生が「義太夫クラブ」を作られ、それに呼ばれて行ったのがきっかけです。けれどもそこに教えにいらしたのが人形の座本の方(人形遣い)だったので、母から「お稽古をするなら専門の方についてほうがよい」と言われ、近所の義太夫の師匠のところへ連れて行かれました。その頃は義太夫好きの母のほうが熱心で、私はどちらかというと歌謡曲のほうが好きで、当時流行していた笠置シズ子の歌を口真似して歌ったりしていました。

その後、大阪から女流義太夫の一行が淡路島にいらしたとき、みなさんをうちにお泊めした関係で、私が前座として興行に出させていただくことになりました。そのときに気に入ってくださった方たちの間で私を「内弟子」として連れて帰ろうという話がいつのまにかでき上がり、中学3年のとき、竹本春駒の内弟子として大阪に行くことになりました。



も披露公演をさせていただきました。

——今回のチラシですが、KAAT初お目見えを記念して、師匠ご自身の淡路島での襲名披露興行の時の白黒のお写真に着色したとうかがっています。いまのお話の頃でしょうか？

**駒之助師** そうです。淡路の地元の人形と一緒にさせていただきました。隣に座っていらっしゃるのが、女流ですばらしい三味線弾きだった豊澤仙平(とよざわせんぺい)さんです。この翌日には、中学校の講堂で

—その後、十代豊竹若大夫、四代竹本越路大夫という男性の師匠に師事されます。駒之助師匠が義太夫を本格的にやっていこうと思われたのは、いつごろですか？

**駒之助師** 18歳のときです。越路大夫師匠から、どう語るべきかを筋立てて説明いただいたおかげで、義太夫が面白くなり、一生勉強させていただきたいなと思いました。義太夫は、語りだけで何人もの人物を演じ分けるのですが、例えば女性でも廓の人と町人の奥さんでは言葉遣いや話し方が違いますね。越路大夫師匠は、位取りや職業によって、どう語りを変えるべきかという基本を説明くださったんです。目から鱗が落ちる思いでした。



—文楽や歌舞伎は男性だけの世界で、女流義太夫を聞かせていただくのは、今回のKAATの公演のような、語りと三味線のかたちで上演される「素浄瑠璃」が基本となります。男性と女性で演目に違いはないとかがいましたが、これまで女流であることのご苦労、男性との違いを感じられたことはありますか？

**駒之助師** 第一に生活のことですね。女流には、文楽や歌舞伎での定席がございませんから、義太夫だけでは食べていかれません。ここが問題なんです。女流義太夫の道を絶やしてはいけませんが、さりとて生活のことを考えると、やりたいという方がみえても、みなさんにぜひこの道に入りなさい、ということができないのが難しいところです。

—11月1日・2日にKAATで上演される「和田合戦女舞鶴」三段目ノ切「市若丸初陣の段」は、上演機会の少ない作品です。聞きどころについてお話しください。



**駒之助師** 主人公の板額（はながく）は男勝りの怪力の持ち主で、性根の据わった人物。「普通の女」として演じてはいけないと教わりました。その板額が忠義のために、我が子市若を、切腹するようながす場面が聴きどころです。暗闇のなかで、市若が聴いているのを意識しながら、第三者に語りかけるように一人芝居をするわけです。文楽や歌舞伎には、忠義のために我が子を手にかけるお話がよくありますが、これは自分で手にかけるのではなく、子どもが自ら切腹するのをうなが

す、しかも面と向かってではなく、暗闇のなかであたかも誰かと話しているように語る、という場面です。市若はまだ11歳。板額は今なら30代後半といったところでしょうか。語り手を含めた7役を一人で語らせていただきます。できるだけわかっていただけのように語らせていただくのが使命だと思っています。

義太夫は「音曲の司（つかさ）」と言われますが、本当にすばらしい芸術だと思います。そして義太夫は「情を語る」ものでもあります。ぜひいまの時代、義太夫をみなさんに聞いていただけることを願っています。

---

今後、懇親会で語られたお話をもとに、「竹本駒之助・女流義太夫一代記」をアップ予定です。ぜひご期待ください！